
応答、あるいは入れ墨を彫ること¹

伊藤潤一郎

1. 方法論をめぐって

あるひとりの哲学者がその死後も長く読まれつづけるとき、そこで重要な役割を果たすのは無批判な賛同者や生前の取り巻きだろうか。それとも、テキストを編みなおしつつ批判的な解釈を重ねていく者だろうか。短期的には前者が力となりうるかもしれないが、それはよくても「最大瞬間風速」のようなものにすぎず、長い目で見ると、肉体が朽ちたあとに死者を生き延びさせるのはまちがいなく後者である。きわめて具体的な局面に即しているなら、生前に親交のあった者たち以外によって、その哲学者が真摯に読まれるかどうかはひとつの分水嶺となるだろう。その点で、拙著『ジャン＝リュック・ナンシーと不定の二人称』をめぐって、筆者よりも若い世代の評者三名と議論をする機会を得たことは、私自身にとっての喜びであるだけでなく、2021年にこの世を去ったナンシーがその死後も生き延びていくひとつのきっかけとなりうる悦ばしい出来事だった。

これまでに何度か書いてきたのでくりかえしになってしまうが、私はあえてナンシー氏とはほぼコンタクトを取らないようにして研究を進めてきた。私がナンシー研究を志した時点で（2010年ごろだったであろう）、すでに哲学者本人は日本の多くの研究者と交流をもっており、非常に豊かな対話が生み出されていたのだが、そのような状況のなかに「後発」の者として参入するにあたって定めた方針が、本人と直接の対話はしないというものだった。そのような選択は何も正当化されるべき類のものではないだろうが、私としてはナンシーとデリダがストラスブールではじめて直接会ったときのエピソードが頭をよぎってしまう。

思い出すのは、イル河畔を散策していたときのことだ。フィリップがジュネットとともに前を歩き、そのあとをデリダとともにジャン＝リュックが歩いていた（リオタールはまだ到着していなかった）。知り合いだったジュネットとフィリップがおしゃべりをしていたのに対し、そのときジャン＝リュックが発見していたのはデリダの沈黙する能力の高さだった。ジャン＝リュックは、会話がロアン宮や大聖堂や旧税関を指し示すだけになり、ほとんど反応が返

¹ 本稿は、同号に掲載されている安藤歴、小田麟太郎、林宮玉の三氏の論考に対する応答である。拙著『ジャン＝リュック・ナンシーと不定の二人称』（人文書院、2022年）に対する三氏の評は、2022年6月18日にオンラインでおこなわれた合評会（主催：大阪大学人間科学研究科共生の人間学講座、共催：脱構築研究会）での報告をもとに執筆されているのに対し、本応答論考は合評会における筆者の応答を活字化したものではなく、三氏の原稿をもとに新たに執筆したものであることとお断りしておく。また、この場を借りて、合評会を企画してくださった安藤歴氏と当日の司会を務めてくださった檜垣立哉氏、またフロアから質問を寄せてくださった方々に感謝申し上げる。

ってこないことに軽い不安を覚えていた……。一転してデリダが饒舌になったのは、彼のまだ小さな息子が無断で自転車に乗って国道へ飛び出していったという最近のエピソードを語ったときである。デリダはそのときに感じた恐怖をなおありありと感じているようだった。私たちがかすかな驚きとともに学んだのは、哲学者とともに話すのは必ずしも哲学についてではなく、仕事はテキストを経由するということだった。²

1970年の春、ナンシーとラクー＝ラバルトは、ジェラルド・ジュネット、ジャン＝フランソワ・リオタール、ジャック・デリダを招いてストラスブールで修辞学をめぐる小さなシンポジウムを開いた。それ以前から手紙のやり取りはしていたものの、ナンシーとデリダが直接会うのはこのときがはじめてであり、この回顧談からもわかるように、両者の会話はうまく弾まなかったようだ。「仕事はテキストを経由する」という最後の一文が、その実感を鮮明に物語っている。

拙著に至るまでの私自身の研究が忠実であろうとしてきたのは、「仕事はテキストを経由する」という態度だったとあってよいだろう。周知のように、かのシンポジウム以降、ナンシーとデリダはテキストのやりとりにとどまらない友愛関係を結んでいくのだが、私のほうは頑ななまでに、哲学者そのひとと直接話すのではなく、書かれたテキストを読み、解釈することにこだわって研究をつづけてきた。しかしそれは、対象と距離を取って客観的な仕方では研究を進めるためではない。むしろ、研究をはじめた当初はテキストだけを読み込むことがアカデミックな研究として正しい方法であり、当事者にしか知りようのない証言に依拠するよりも、テキストという誰にでも開かれた証拠を示して論文は書かれるべきだと思っていたが（いまでも基本的にはそう考えている）、ナンシーのテキストを読み込んでいくうちに、テキストだけを読むことによって、逆にアカデミックな約束事を食い破る瞬間をも捉えられるようになるのではないかと思うようになっていった。そのための鍵となったのが、「不定の二人称」という独特な人称にほかならない。

拙著が「不定の二人称」という読解格子とともに（いささか乱暴とも思われかねない仕方）提示した「投壘通信」のモチーフは、書き手の肉体が朽ちたあとであろうとテキストさえ残りつづければ生じうる出来事である以上、同じ時空間を共有する対話ではなくテキストにこだわるという研究方法から見出されてきたものだといえる。そして、私には「投壘通信」について語る哲学者としてナンシーを読むということは、そのような解釈を提示する行為がひとつの「投壘通信」とならなければならないように思えたのだった。またしてもナンシーとデリダの関係を参照すれば、ナンシーによるデリダ論である「省略的な意味」の冒頭は、ナンシー自身の方法論に関してきわめて示唆的である。

ジャック・デリダについて書く。それは、私には暴力的なことに思える。誰かに「ついて」書く、つまりある作品や思考に関して書くことほど凡庸なことはない。デリダ自身がそのよ

² Jean-Luc Nancy et Philippe Lacoue-Labarthe, « Derrida à Strasbourg » in Jacques Derrida et al., *Penser à Strasbourg*, Galilée / Ville de Strasbourg, 2004, p. 14-15.

うな行為をしなかったわけではないのだが、デリダについて書くことが求められるようなこうした機会には、彼によって仕掛けられた罫がある。デリダの言葉の用い方、言葉を最大限に利用せんとする情熱、言葉に——つねに荒々しく——触れようとする狂気、こうしたことから即座に課されるのは、彼のうえに書き、彼の身体のうえに書くということだ。資料体について書くのではない。身体のうえに書くのだ。身体を『流刑地にて』の機械の下に送り込み、身体に入れ墨を彫るのである。³

フランス語の前置詞 « sur » は、英語の « on » と同じく、「ついて」という対象を示すと同時に、「うえに」という接触をも意味する。同じ語によって、距離を取った関係と距離をあらんかぎりなくした関係の双方が示されるという事実を踏まえながら、ここでナンシーは明らかに「うえに」のほうを重視し、デリダについて論じることを、デリダのうえに書くことへと横滑りさせている。それは、デリダから距離を取って論じるのではなく、入れ墨を彫るようにしてデリダのテキストのうえに別のエクリチュールを書き込んでいくような作業である。これこそ、ナンシーが誰かについて論じるときの方法論にほかならない。そして重要なのは、ナンシーが彫った入れ墨がデリダの意に染まないものだったという事実だろう。ナンシーが「省略的な意味」で書き込んだのは、タイトルが示すとおり「意味 (sens)」という名の入れ墨であり、いうまでもなくこれはデリダが忌避する名のひとつだった（拙著第5章参照）。

暴力的なように思われようと、私が「投壘通信」というモチーフを拙著の末尾に書き込んだのは、まさにナンシー自身の方法論に従って、ナンシー自身に入れ墨を彫ったのだといえる。その意味で、いわば拙著はナンシーについての研究書であると同時にナンシー的な研究であろうともしたわけだが⁴、これはアカデミックな哲学研究の基準からするとおそらく逸脱的とみなされるところだろう。「研究者なのだからナンシーのように書くな」という声が聞こえてきそうだが、アカデミックな方法論に則ることとナンシー的であることは両立しうるはずなのだ。その成否は評者や読者にゆだねるほかないが、「来るべき哲学研究へと向けた一つの風穴を開いている」という小田論考の結びは、以上のような問題意識とともに研究に取り組んできた者としては望外の喜びであった。

「結局のところ、暴力なしに書くことは無駄なのだ」⁵。無批判な賛同者が身体を無傷なままに保存しようとするのに対し、少なくとも解釈が暴力をともなわずにいられないことを否認せず、その暴力を自覚しながら入れ墨を彫るとき、入れ墨を彫られた身体は新たな意味へと向かって生き延びるだろう。三名の評者それぞれが彫った入れ墨に対し、以下ではさらなる応答を試みたい。

³ Jean-Luc Nancy, *Derrida, suppléments*, Galilée, 2019, p. 13. 強調は原著者に属する。

⁴ 拙著と共鳴する方法論的意識から著された研究書として以下を参照のこと。坪光生雄『受肉と交わり——チャールズ・テイラーの宗教論』、勁草書房、2022年。また、『福音と世界』2023年4月号掲載の同書に対する拙書評も参照されたい。

⁵ Nancy, *Derrida, suppléments*, p. 14.

2. 言表行為をめぐる——小田論考、林論考への応答

拙著は、ナンシー哲学の軸を言表行為に見て取るものだった。言葉を発するという行為が、1960年代の最初期の論考から晩年の著作にいたるまでナンシーの思考を貫く問題であり、1970年代の主体の脱構築ともいうべき仕事や1980年代以降の有名な共同体論、さらには1990年代から展開された「キリスト教の脱構築」のプロジェクトも、すべて言表行為というテーマのさまざまな変奏として理解しうる。

そのような見通しのもとにナンシーを読み解いていくと、とりわけ1980年代以降のテキストにおいて、言表行為と存在論が緊張関係に置かれているようにみえてくる。拙著では、1986年の『無為の共同体』以降のナンシーの著作は、[……]言語論に端を発する議論の存在論化をさらに探究するものだと言っても大きく外れてはいないだろう」(215頁⁶)として、言表行為の理論から存在論へと重心を移しつつも、依然としてナンシーは言表行為についての議論の枠組みのもとに存在論を作ろうとしていると指摘した。

簡潔に言えば、拙著は存在論や自己脱構築などさまざまな関連テーマに対して、言表行為論中心（優位）で解釈を進めているのだが、小田論考ではこの点が批判的に検討されている。拙著では扱えなかったテキストを含めて議論を展開している小田に対して、反論すべきポイントはないように思える。言表行為という光源から強烈な光を当てることによって成り立つ拙著においては、当然、その強すぎる光によって見えなくなってしまうナンシーのテキストの襞や窪みが存在する。小田はそのような陰影を丹念に描き出しており、その批判的指摘の先には、言表行為という枠組みからは零れ落ちてしまうナンシーの姿が垣間見えている。とくに「自由の経験」を軸にしたナンシー像は、おそらく言表行為中心のナンシー解釈とは異なる哲学者の思考のありようを浮かび上がらせるものであるだろう（拙著では、ナンシーの主著のひとつである『自由の経験』をほぼ論じることができていない）。

いうまでもなく、ナンシーのように書くことに取り憑かれ、縦横無尽に多様なテーマを語った哲学者のテキストは一枚岩ではありえない。拙著が描き出しえたのは、言表行為というひとつの視点からみた（言表行為というテーマのみを強烈にクローズアップした）ナンシーにすぎず、解釈者それぞれの視点からみた多数多様なナンシーが今後現れてくるにちがいない。小田論考はそれを予感させるものだといえる。

また、言表行為と密接に関連する問いとして、拙著の第5章では「古名の戦略」を論じた。あらためて確認しておけば、既存の名を残しつつその意味をずらして言語システムへと介入するこの戦略においては、いかなる古い名を残すのかという以下のような問いが生じてくる。

「古名の戦略」は選択の問題とならざるをえない。いかなる名を戦略的に選択し、言語システムにおける闘争に介入するのか。こうした名の選択と決断の問題が、「古名の戦略」からは

⁶ 伊藤潤一郎『ジャン＝リュック・ナンシーと不定の二人称』、人文書院、2022年。以下、拙著からの引用は（ ）内に頁数を記す。

必然的に提起される。(255 頁)

このような「名の選択と決断」の問題こそ、ナンシーとバタイユの関係から主体の脱構築の問題を追う林論考の末尾における、「発話する主体の倫理性や社会性が問われるべき」という指摘に応答しうるポイントだろう。「古名の戦略」においていかに意味が変容され、言語システムが揺れ動いていようと、現に古い名は残りつづけており、そこからは不可避的に既存の意味が形成されてくる。そのような古い意味に対して、いかなる倫理的態度が必要とされるのか。おそらく、「意味」という語に対するナンシーとデリダの態度の違いはこの点に関係している。ナンシーが選択する「意味」という古名は、デリダの目にはあまりにも危険に映ったわけだが（拙著第 5 章第 3 節参照）、両者の古名の選択の差異は両者の語彙選択の倫理の差異に等しいだろう。

ただし、名の選択が決断である以上、そこにはいついかなるときも通用する普遍的な規則は存在しない。「今度はあえて主体の成立する条件を問う必要性が現れているのではないか」と指摘する林とともにその必要性を認め、名の選択に関する倫理を状況に応じて思考しつづけなければならないだろう。それは、ナンシー的に思考することであって、ナンシーと同じ語彙を選択することではない。私たちひとりひとりが巻き込まれている歴史と場の状況のなかで、一般的規則の通用しない倫理を編み出していかなければならないのだ。まさにそのような行為が、入れ墨を彫り応答するということにほかならない。

3. 不定の二人称をめぐる——安藤論考への応答

拙著の議論から発展的な論点を導き出す安藤論考に対しては、まず二人称複数について応答することからはじめたい。

タイトルのとおり、拙著はナンシー哲学を解釈するための読解格子として「不定の二人称」という独特な人称を提示している。簡単に振り返っておけば、「誰でもよい」という不定の人称と「あなた」という二人称が組み合わさった「誰でもよいあなた」へと言葉を差し向けることが、ナンシーの言表行為論の核となっている、というのが拙著のテーゼだった。このような不定の二人称という考え方に対し、安藤は「誰でもよいあなたたち」についてはどのように考えられるのかと問うている。

不定の二人称単数と不定の二人称複数のちがいについては、「誰でもよいあなた」への言表行為において生じている事象に立ち戻る必要があるだろう。拙著の結論からの引用によって確認しておきたい。

私たちはそれと知らずにこのような誰でもよいあなたへと向けて投壘通信としての言葉を投げており、それがどこかのあなたに漂着したとき、投げ手の意図を超えて意味は変容するにちがいない。一義性をもたえないこうした意味の開けにおいてのみ、私たちは共同体を形成するのであり、ナンシーが語る共同体とは、実のところ投壘通信の共同体にほかならないのである。(302 頁)

重要なのは、不定の二人称への言表行為において生じるのが意味の変容だという点である。別の言い方をすれば、意味の変容においては、意味が投げ手にも受け手にも所有されていない。誰にも意味を占有されない言葉が、逆説的にも共同性を生む言葉なのである。このように意味が変容して所有から切り離されるためには、「あなたたち」という複数ではなく、「あなた」という単数が必要とされるのではないか。つまり、意味の変容が生じるのは、ほかならぬ私というひとりの受け手によって言葉が受け取られるときなのではないか。この点に関しては、拙著でも引用した『アドラシオン』の次の箇所を思い起こしたい。

感嘆は、沈黙を横切って彼方へと向かうかもしれない。感嘆はみずからを消し去り、その全体がある固有名詞のうちへと滑り込むかもしれない。そのときこの固有名詞の意味の全体は、「君がそこにいるなんて！」ということだ。⁷

意味が所有の体制から離れるためには、言葉を受け取る側に単数の固有名詞が必要なのである。そのように考えられるがゆえに、ナンシーの哲学は「特異性 (singularité)」をキーワードにしているのだろう。「誰でもよいあなたたち」ではなく、「誰でもよいあなた」でなければ、言葉を受け取るときにそれが「ほかならぬ私」となることはなく、意味が所有から解放されることもない。それゆえに、ナンシーが語るような共同性を形成する言葉は、不定の二人称単数へと宛てられなければならないのである⁸。

また、不定の人称についての指摘にも応答しておきたい。安藤論考では、「誰か」という不定の人称とハイデガーが語る「ひと (das Man)」のちがいについていかに理解すべきかと問題提起がなされている。この点を明確にするためには、〈計算可能／計算不可能〉ないし〈交換可能／交換不可能〉という対立軸を考慮に入れる必要があるだろう。ハイデガー的「ひと」とは、いうまでもなく計算可能で相互に交換可能な「誰か」だが、それに対し拙著で論じたナンシーの「誰か」は計算不可能で交換不可能な「誰か」だといえる。これについて十分に論じるには、とりわけ『世界の意味』の「誰か」の章を子細に検討する必要があるが、さしあたり指摘しうるのは、「quelqu'un」というフランス語の単語には、「誰か」という日本語では訳しえない「一」のニュアンスが含まれており、ナンシーがそれを「特異性 (singularité)」と結びつけて思考しているということである⁹。

以上を踏まえると、安藤論考の指摘は、いずれもナンシーにおける「特異性」と結びついた「一」をいかに把握するかという点に関係しているともいえるだろう。そしてそれは、論考末尾で述べ

⁷ Jean-Luc Nancy, *L'Adoration (Déconstruction du christianisme, 2)*, Galilée, 2010, p. 112. [『アドラシオン—キリスト教的西洋の脱構築』メランベルジェ眞紀訳、新評論、二〇一四年、一七〇頁]

⁸ この点に関しては、「一人の思想は、一人の幅で迎えられることを欲する。不特定多数への語りかけは、すでに思想ではない」と語った石原吉郎を思い起こしたい。以下の拙稿を参照のこと。伊藤潤一郎「一人の幅で迎えられる言葉」『群像』2022年10月号。

⁹ Cf. Jean-Luc Nancy, *Le Sens du monde*, Galilée, 1993, p. 111.

られているように、「別の政治的言語のあり方」、「別の民主主義のあり方」へと向かう道なのかもしれない。

おわりに

これまでナンシーについて論じた日本語の著作は、澤田直による先駆的な『ジャン＝リュック・ナンシー——分有のためのエチュード』（白水社、2013年）があったのみで、拙著は日本語でのナンシー論としては二冊目となる。くりかえしになるが、ある哲学者のテキストが長く読まれつづけるかどうかは、解釈者たちが哲学者の多様な姿を立ち上げられるかどうかにかかっている。それゆえ、拙著とはまったく異なるナンシー像が今後打ち出され、さまざまなナンシー論が登場してくることを願ってやまない。

とはいえ、この点に関して私自身は楽観的な見通しをもっていることも記しておこう。今回、拙著の合評会をとおして実感したのは、評者三氏の目にはそれぞれ異なるナンシー像が映っているということだった。三氏の手によって、これまで見たことも聞いたこともないようなナンシーの相貌が遠からず現れてくることを楽しみにしている。